

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19720167

研究課題名 (和文) 近代日本における「脱教团的」仏教者の社会史的研究

研究課題名 (英文) A Social Historical Study of the "Trans-sects" Buddhist in Modern Japan

研究代表者

谷川 穰 (TANIGAWA YUTAKA)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10362401

研究成果の概要 (和文)：

幕末・明治期に活躍した僧侶・佐田介石について、その思想と行動を新たな史料の発掘・分析をもとに歴史学的に検証した。介石の活動や、昭和期の社会学者・浅野研真が行った介石研究のありようから、近代仏教史の全体像を解明する際、宗派の枠を越えた「脱教团的」僧侶に注目する視点が不可欠であることが改めて浮き彫りとなった。

研究成果の概要 (英文)：

In this historical research, I considered Kaiseki Sada who was a Buddhism priest at the end of shogunate and in Meiji era. I analyzed the thought and the action while excavating new historical materials. Especially I studied not only Kaiseki, but also Kenshin Asano, who was a sociologist in the former of Showa era and researched Kaiseki. As a result, if the whole image of the history of modern Buddhism was drawn, it was clarified that the aspect that paid attention to "Trans-sects" priests who exceeded the frame of the sect was indispensable.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	480,000	3,080,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近代日本 仏教史 宗教史 社会史 僧侶 脱教团 佐田介石 浅野研真

1. 研究開始当初の背景

近代仏教史の研究は、他宗教、あるいは他時代のそれらに比べてもはつきり立ち遅れている。1950～60年代に公刊された吉田久一の

研究がいまだに第一級の研究であり、以後の研究は各論への細分化という傾向が強い。戦争協力、排仏的風潮と社会的地位の相対的低下、思想的魅力の乏しさなどの理由から、宗

教学・仏教学では決して人気のある研究対象ではなかった。また先行研究に共通した欠点として、日記や書簡など、手稿の一次史料を幅広く読みこなせていない、という限界があった。新出史料の発掘・紹介・考察という基礎作業が脆弱なまま、いわばおなじみのトピック・人物に偏した近代仏教史像が再生産されつづけている。1990年代以降も末木文美士や大谷栄一らの研究を除けばまとまった成果は乏しく、その裾野の拡大がもとめられる段階であった。

2. 研究の目的

そこで、明治期を中心に近代仏教史像の基礎構築を目指した。特定の宗派や、思想史的に価値があるとされる人物に偏った描き方ではない方向性を意識した。

19世紀前半の西洋科学の紹介、そして幕末のキリスト教流入は、世界観を含めた仏教教義へ深刻な問いをつきつけ、宗派を越えた一個の「仏教」という意識を僧侶たちに与えた。そして明治期には宗派の各代表が集う組織が結成されるようになるが、その先駆けとなったのが、佐田介石（1818-1882）である。介石は幕末には西洋科学に対抗した天文学者として知られ、明治に入ると政治活動に精を出す。明治10年を境に方向転換し「ランブ亡国論」などの舶来品排斥演説や各地の結社組織に奔走した。当時の民衆社会でカリスマ的知名度を誇った僧侶である。介石は支持者から三都を中心に彼を招聘し演説を依頼されたが、その依頼は宗派や僧俗を問わず行われ、介石自身も真宗本願寺派から天台宗に転宗した。思想史的観点から見れば、奇矯なナショナリスト・復古主義者であり価値の乏しい者となろうが、その声望は宗派の枠を越えて高く、死後も支持者組織が存続・復興したという人物であり、従来の仏教史では十分位置づけられてこなかった。その思考と行動の軌跡はまさに「脱教团的」であり、その検討を通じて、介石を支持した社会のありよう、そして仏教の社会的位置を見定めることを当面の主たる目的とした。

しかしそれは単なる伝記的研究ではない。本研究ではさらに、介石を研究し世に紹介した昭和初期の仏教社会学者・浅野研真（1898-1939）の著作と研究活動を追った。浅野は大谷派寺院の出身だが、社会学者としてフランス留学、帰国後は旺盛な著作と多彩な活動（プロレタリア教育運動、エスペラント普及運動、「邪教撲滅」運動、一向一揆研究など）を行った。彼が集積した介石研究史料はまた、介石に魅せられた人々の軌跡をも照らし出す。そうした「脱教团的」仏教者の系譜を、明治中期から昭和初期を対象に明らかにすることも目的とした。加えて、介石が

脱することになった本願寺派教団の歴史を、その代表的な高僧・利井明朗（1831-1918）の遺した一次史料から分析することで、近代教団が末寺僧侶をいかに統制したかを軸に、単なる発展史ではない教団の曲折として描き、近代仏教史像の重層的な把握を目指した。

3. 研究の方法

1で指摘したように、不可欠な作業は新出史料の発掘・考察という基礎研究であった。そこで、利井明朗が住職をつとめた常見寺（大阪府高槻市）所蔵文書の調査・分析を最初の基礎作業とした。所蔵文書には利井に宛てた僧侶・門徒からの書簡、書類が数百点、明治前期から大正初期にわたって存在する。それらを適宜撮影し、解読を進めた。

他方、「脱教团的」仏教者についても同様に、佐田介石の著書・雑誌・書簡の収集を継続し、逐一検討を加えた。介石の史料は扁額・書簡・石碑など未見のものが全国に散在しており、それらの寺院を順次訪問した。その際、書面等の予備調査を重ね、遠方への調査での成果を期すとともに、宗門系大学や教団関係者からの情報収集、および法事多忙期を考慮した調査時期の設定なども工夫した。

次に、昭和期まで対象時期を延ばして「脱教团的」仏教者の系譜学的検討を行った。具体的には、寄贈を受けた故浅野文雄氏（滋賀県東近江市）旧蔵文書の検討である。浅野研真の蔵書や著作物、留学時の日記、研究ノート、あるいは取り交わした名刺、書簡などが千点以上にわたって含まれる。それらをもとに、浅野が介石研究へ至る軌跡を考察した。またそこから遡り、大正期に介石顕彰の団体を結成した沢日向、明治後期に介石の遺志を継ぐことを主旨とする仏教雑誌『日月』を創刊した仁藤巨寛、といった無名の仏教者を追った。東京大学明治新聞雑誌文庫や国会図書館憲政資料室、および彼らが活躍した静岡県沼津市、山形県鶴岡市に関する調査も行った。

4. 研究成果

(1) 明治初年～20年代の仏教界について学校教育との関わりから実証的に追究し、その密接な関係性を明らかにし、学術書にまとめた。そこから、近代仏教教団の末寺・信徒に対する影響力と、その枠から飛び出す僧侶（「脱教团的」仏教者）の存在という二つの論点が改めて浮上した。そこで前者の点について、常見寺所蔵の数百点にのぼる同教団関係者の書簡・上申書の存在を明らかにし、僧侶養成学校を舞台にした地域寺院・信徒と中央の教団との葛藤のありようを見いだすことができた。

(2) (1)の後者の点については、佐田介石と1890年代～1930年代における介石研究の足跡をたどり、介石関係史料の目録と彼の詳細な年譜、および浅野研真関係の資料目録もほぼ完成させた。後者には介石の書簡を書写したノートなど未発見の史料が数多く含まれており、介石の足跡について従来不明であった部分の多くが明らかになった。またその整理過程で、浅野には筆名を変えて掲載された新聞での連載記事をはじめ、いまだ把握しきれていない膨大な著作があることが判明した。それらを明らかにしつつ目録の不備を埋め、介石関係の研究資料の翻刻も進めた。この二つの作業は密接に関わっており、浅野には介石と自分とを重ね合わせるという行動様式があったことが読み取れ、作家岡本かの子から「現代の介石」との評を受けていたことも判明した。実際、伝記の刊行について『佐田介石全集』の刊行にむけて介石の著作を翻刻していたこともわかった（原稿を発見した）。浅野の念頭には、介石に仏教者として共鳴するとともに、国際連盟脱退後の日本がとるべき自給経済構想や西洋世界への対抗策について、介石の舶来品排斥運動に今こそ学ぶべきとの考えがあったのである。

(3) こうした作業の過程から、別の二つの論点も浮かびあがった。一つは、明治期以来形成されていった教団の近代的特質を探る必要性である。そこで、明治前期から中期にかけての大谷派本山の動向を、京都府知事・北垣国道や、岩倉具視・松方正義ら政府要人との関係から検討し、論文にまとめた。その結果、とくに三井銀行など金融機関との関わりから、近代教団の財政基盤形成という新たな視点を提起し得た。もう一つは、同じ時期における仏教の社会的位置を他の思想的系譜との関わりから把握することである。その予備的考察として、明治中期の学校教育における修身教科書の内容検討と、その流通過程に関わる学会報告も行った。介石同様の「脱教团的」ないし宗派を越えて活動した僧侶たちの手によって、その時期に仏教修身教科書の編纂が行われたが、その流通に際してはさまざまな方法（見本の頒布、中央・地方学務官吏への宣伝など）が必要であったことを確認しえた。

(4) 以上の基礎研究をふまえて、次のような具体的局面が解明されたと総括できる。第一に、介石が教団を去るきっかけとなった1879年の「東移事件」（本願寺派の内紛）のように、「脱教团的」な動向の勃興とそれへの抑圧が19世紀の終盤に顕わになったこと。第

二に、介石が演説していない箇所にも結社ができるほどの名声を博し、介石の招聘には地域の各宗派僧侶の合議も多くみられたこと。「脱教团的」仏教者は彼単独でそうなったわけではなく、支持者の存在を十分考慮すべきであるとの視座が必須であろう。第三に、明治後期に介石の弟子である仁藤巨寛が東京で介石支持結社を再興し、大正期には澤日向が同様の結社を組織し展覧会なども開いたこと。第四に、吉野作造による介石著作目録の作成や浅野による顕彰で、介石が「明治文化」を彩る人物として『明治文化全集』にも著作が掲載され、浅野によって評伝も刊行されたこと。さらに『佐田介石全集』刊行計画まで持ち上がる空前のブームとなったが、単なる「奇矯な愛国僧」として表象され、第二次世界大戦後忘れ去られること。

(5) 明治期の「脱教团的」仏教者として、日蓮宗の田中智学や曹洞宗の大道長安ら、教団を離脱した後、新たに自らの思想をもとにした組織を形成する事例はすでによく知られる。また清沢満之のように、教団改革運動を牽引しつつ思想を深めた僧侶もいる。しかし、介石や彼のフォロワーのように、宗派の枠に縛られずより幅広い民衆に接近して活動する場合、彼らを時に利用し、時に熱狂する民衆のありようこそが彼らの思想を逆に規定する。言い換えれば、単なる思想研究や人物・組織論だけではない、民衆思想史の組み直しにも通じる問題が近代仏教史の課題として浮上するように考えられる。こうした問題の指摘は、従来の国内外の近代仏教研究においては全く考えられておらず、堅実な基礎作業をもとにしている点でも、宗教学や歴史学界に独創的で強いインパクトを与えるものと言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

① 谷川穰、「教」の時代——近代日本形成期の仏教と民衆教化・僧侶養成・俗人教育、季刊日本思想史、査読なし、75号、2009、36—53頁

〔学会発表〕（計4件）

① 谷川穰、明治前期の仏教と学校教育、日本宗教学会第66回学術大会、2007年9月16日、立正大学

② 谷川穰、『国のすがた』の後ろすがた——明治中期、下田歌子の修身教科書編纂をめぐる一、京都大学読史会 2008年度大会、2008

年 11 月 3 日、京都大学

③谷川穰、分離せず、衝突せず—明治期の教育と仏教の一側面—、日本宗教学会第 68 回学術大会、2009 年 9 月 12 日、京都大学

〔図書〕(計 2 件)

①谷川穰、明治前期の教育・教化・仏教、思文閣出版、2008、372 頁

②谷川穰、他、近代京都研究、思文閣出版、2008、365—389 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷川 穰 (TANIGAWA YUTAKA)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10362401

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号：